



武蔵野

埼玉大学図書館 2010年4月5日5号



フレッシュマン 特集号

図書館紹介

新入生のみなさん、ようこそ埼玉大学へ。受験勉強から解放され、新しい生活を楽しく設計されているのではないのでしょうか。高校生に比べ、あらゆる面で自由度が大きくなる大学生、自ら選択する機会が多くなり、入学当初はいろいろ戸惑うこともあるでしょう。大学生活でもっとも大きな位置を占めるのは勉学です。高校までの勉強とは、量的にも質的にも、また広がりも深さも大きく異なります。専攻領域、専門領域によっても違いますが、学習する範囲は日本国内に留まらず、

世界中に一気に広がります。知りたい情報を収集し、さらに深めたい内容を追究するには、英語を初めとして多様な言語を駆使することも必要になります。埼玉大学図書館は、みなさんの大学生活が実り多いものになるよう、有益な情報を提供し、学習や研究を進めるお手伝いをします。「必要な文献や図書、雑誌、新聞記事は、どのようにして探したらよいのか?」、「いったい図書館はどこなの?」、「図書館にはどんなサービスがそろっているのか?」…。みなさんにとって

埼玉大学図書館は、未知で館内で出会うものすべてが初体験でしょう。大画面テレビで海外番組を視聴することができますし、DVD・レーザーディスクもご利用いただけます(2階国際交流コモンズ)。コンピュータを使った各種の検索もできます。まずは、図書館に入ってみてください。今回の「武蔵野」は、新入生のみなさんに図書館を知っていただき、大いに活用していただくために、「フレッシュマン 特集号」とし、図書館を紹介します。

(図書館長 坂西友秀)

図書館オリエンテーション

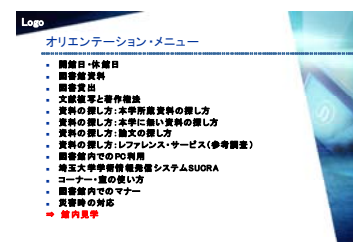


図書館を身近な学習・研究の場として利用していただくために、「図書館オリエンテーション」を開催します。開催期日は、4月12日から16日の間

です。オリエンテーションは、図書館を有効に活用するための知識とスキル(技能)について皆さんに説明・講習するものです。館内を見て回る、施設見学も行います。

扱う主な内容は、次のとおりです。図書館の開館日・休館日、図書館にある資料、資料の探し方、館内でのPCの利用、埼玉大学学術情報発信システムSUCRA、図書館内のマナー、等。友だちと誘い

合わせて、ご参加ください。みなさんのご来場をお待ちしています。



学生生活に差がつく！図書館活用

大学の勉強では、「自分で正しい情報を探す」ということが大切です。
図書館を上手に利用できれば、授業課題やレポート作成、研究にきっと
役に立ちます。**オリエンテーションは図書館を利用するための第一歩です。**

図書館 オリエンテーション

場所：グループ学習室(図書館3F 第3閲覧室)※予約不要

| 日程 | | 説明(40分) | 館内見学(20分) |
|----------|-----|-------------|-------------|
| 4月12日(月) | 第1回 | 10:40~11:20 | 11:20~11:40 |
| | 第2回 | 14:40~15:20 | 15:20~15:40 |
| 4月16日(金) | 第3回 | 16:20~17:00 | 17:00~17:20 |

説明内容

- 図書館の資料はどのように利用するのか？
- どこにどのような資料があるのか？
- 欲しい資料はどのように手に入れるのか？
- 資料を読む・借りる以外の図書館利用法は？
- 「機関リポジトリ」とは？



館内見学

- 閲覧室や図書の配置場所のほか、当館の貴重資料である官立浦和高等学校記念資料室もご案内いたします。

埼玉大学研究協力部図書情報課利用サービス係

E-mail : libill@ml.saitama-u.ac.jp

電話: 048-858-3668

図書館発見

留学生・留学希望者にうれしいニュース

参考図書室の東南の角地であり、AVブースの横に「国際交流コモンズ」というコーナーがあります。2面が窓であるたいへん明るいところです。海外から入学した留学生や海外へ留学したい日本人学生のための学習書や日本文化資料などがあります。今年度、新たに

約500冊の留学生のための基礎的・基本図書を入れました。



また、図書の他にはCNN放送番組や中国・香港・アメリカの衛星放送番組を視聴できる受像機があります。

ゆったりと腰を下ろして、図書を読んだり、衛星放送番組を視聴するためのソファや椅子を用意しましたので、気軽に利用してみてください。

グループ学習室新設

「資料が揃っている図書館で何人かで相談したり、課題について一緒に調べたい！」そんなご要望にお応えして、第3閲覧室にグループ学習室を新設いたしました。少人数の学生や教職員グループで学習・調査・研究等を目的とした場合に利用できます。

利用人数は3名～12名以内で、利用日の1週間前から予約を受け付けます。代表者

が図書館2階カウンターで事前予約をしてください。



利用時間は図書館開館時間内の30分～120分以内で

す。次の時間帯に予約が入っていないければ60分延長が出来ます。

会話は常識的な範囲として、拍手・大声での議論等は慎んでください。

飲食・喫煙は禁止です。備品は丁寧に扱い、利用後は元の状態に戻してください。利用規則を守って、大いに学習にお役立て下さい！

官立浦和高等学校記念資料室

埼玉大学は、1949年に新制大学としてスタートしました。本学は、官立浦和高等学校と埼玉師範学校を母体としています。埼玉大学は、この官立浦和高等学校同窓会の資料を譲り受け、大学として整理・保管・情報発信しています。2009年に図書館3階に官立浦和高等学校資料室と貴重図書庫を開設するに至りました。記念資料室で旧制浦和高等学校の雰囲気を感じてみてはいかがでしょうか。開設を記念して「図書館と県民のつどい 2009」に特別参加し、「デカンショ」の原書を展示しました。展示にあたって教養学部の高橋克也先生に「デカンショ」について解説していただきました。ここに転載いたします。



記念資料室貴重書書庫



記念資料室

「デカンショ」によせて

高橋克也

(埼玉大学教養学部准教授・哲学)

「デカンショデカンショで半年暮らす、あとの半年寝て暮らす。」このデカンショ節なる歌を旧制高校の学生たちが愛唱していたことはよく知られている。もともと丹波篠山の民謡で、「デカンショ」の元来の意味については諸説あるようだ。しかし、学生たちにとっては、それはデカルト、カント、ショーペンハウエルの三哲学者のことであり、この歌は彼らの学問的情熱と自負が託された歌である。彼らは「哲学書は必読書」という意識を持っていたのであり、その心は、何をやるにせよ自分にとって最も本質的なことに精力を傾注したいという渴望であっただろう。他方、「あとの半年寝て暮らす」というくだりには、本質を究めることさえ忘れなければしゃちほこばって生活する必要はないという、自由の気風が感じられるのである。

少し解説しておく、デカルト(17世紀フランス)は、「われ思う、ゆえにわれあり」の言葉で有名な哲学者であり、権威を盲信せず何事も自分の理性で一から考えてみるべしという考えを実行した人である。カント(18世紀ドイツ)はというと、理性の重要性を説いただけでなく、理性の限界を見定めようとした人である。その結果、デカルトがまだ執着していた神、魂、無限といったものについて、その存在を証明しようとしても無理であると結論することになる。そうしたものはあくまで理想なのであって、理想は無限であるべきだが思考は実証的であらねばならない。それがカントの言おうとしたことである。

それにしても、デカルト、カントの次がなぜショーペンハウエル(19世紀前半ドイツ)なのだろうか。この時代を代表した哲学者と言えばヘーゲルであり、他方、ヘーゲルに対する一方的な敵愾心を燃やしながら、時代の表舞台に出ることのついになかった日陰の哲学者がショーペンハウエルだ。彼の書物が学徒たちの必読書に数えられていたのは、「デカンショ」という語呂のよさにも当然だろうが、ほかにも理由を考えることができるだろうか。

第一に、「この世は幻のようなもの」という厭世的な認識と感情を分かりやすく美しい言葉で綴ったこの人の文章は、不条理に敏感な青年たちの琴線に触れるものであったに違いない。そして

第二に、ヨーロッパにおいて、実証的科学が大きな成果を積み上げていた19世紀半ば以降、その裏側でこの厭世哲学者の思想が隠然と存在感を誇り、支持者を得ていたという事実がある。日本人が西洋の学問を学び始めた19世紀末、明治の知識人がショーペンハウエルを手取る環境は確かにあったわけである。私は以前、夏目漱石の研究をしている人の手伝いをして、こんな発見に立ち会ったことがある。『吾輩は猫である』に「天然居士」という早世した哲学徒の話が出てくるが、そのモデルである米山保三郎が行っていた研究もショーペンハウエルの空間論に関するものだったのである。

さて、今回の展示資料はデカンショたちの書物とその翻訳書、研究書であり、旧制浦和高等学校の蔵書の一部である。これらの書物を眺めていると、デカンショの時代よりむしろ、これらが出版され、購入された昭和前期の空気が伝わってくるようだ。特に感慨深いのは、太平洋戦争のさなかにも哲学の研究書が出版されていることである(たとえば桂寿一『デカルト哲学研究』1944年)。戦中の学生たちには、これらを納得いくまで読むことを望んだ人がたくさんいただろう。しかし、文科系の学生・卒業生たちが「学徒出陣」(1943年)で戦地へ送られ、学問への欲求を貫徹しないまま散っていったこともまた人の知るところなのである。『さけわだつみのこえ』(岩波文庫)を読むと、彼らが書物や思索への消せない渴望を抱えていたのがよく分かり、まことに痛々しい。中には、当時の一高校長であった安倍能成への敬愛の情をうかがわせる手記や手紙なども出てくる。本展示でも安倍能成の手になるカントの訳書を見ることができるはずだ。

戦争に直面したのはもちろん日本人だけではない。ここにある洋書の著者・编者たちの中にも、重要な態度決定を迫られた人が少なくなかったのである。たとえばブルーノ・パウフ(Bruno Bauch)という人は、この著作(『イマヌエル・カント』1921年)を刊行する少し前、反ユダヤ主義の考えを新聞に寄稿したために学界で大きな非難を浴びていた。といっても、すべてにおいて偏狭な人物だったわけではなく、新しい数学・物理学を踏まえ

てカント哲学を再検討する姿勢を持っていた人でもある。論理実証主義の中心人物カルナップが一時その門下にいたのもパウフのそうした傾向ゆえであった。(論理実証主義はナチスから疎まれた哲学の潮流であり、関係者は亡命したり学生に射殺されたりしている。)ここにはまた、エルンスト・カッシーラー(Ernst Cassirer)の編集したカント全集の一部があるが、カッシーラーはユダヤ人であったため1933年に降亡命を重ねて、アメリカに定住することになる。

こうして戦前・戦中のごく一断面を見ただけで

も、ある疑問が浮かんでくるのを禁じえない。慌しく、生命の危険を自覚せざるをえない世の中でも、人はなぜ学問を通して物事を根底から考えようという欲求を失わないのだろうか。それは、真理が多数決では決められないものだからだろう。そういう真理というものを愛する人は、世の中がどこへ向かおうと、その愛を捨てられないものなのである。「半年寝て暮らす」というのは、つまりは、時流に流されて自分を失うことへの疑問の意識である。「デカンショ節」の不思議な含蓄はそのあたりにある、と私は考えている。



子どもと図書・文化



図書館は、大学生やおとなに利用されるだけではありません。子どもも大切な利用者です。埼玉県立図書館の子ども向けの活動・事業について寄稿していただきました。また、埼玉大学には保育施設「そよかぜ」があります。留学生の子どもたちを数多く受け入れている国際色豊かな「そよかぜ」を紹介していただきます。男女共同参画社会の実現に力を注ぐ埼玉大学で、保育施設は教職員・学生の就業、勉学、教育・研究を支援する上で不可欠です。埼玉大学図書館は、大学の方針の実現に向けて協力していきます。

埼玉県立図書館の児童サービスについて

埼玉県立久喜図書館は、児童書の網羅的収集による資料センターとしての機能を担うほか、市町村立図書館の担当者を対象に児童奉仕研修会等を行っています。



さらに、平成16年に策定された「埼玉県子ども読書活動推進計画」を受け、久喜図書館内に「子ども読書支援センター」を開設しました。県内における子ども読書活動の拠点として、図書館員、ボランティア、保護者、教員からの相談に

対し、コーディネイト等の役割を果たし、「子どもの読書活動推進」というネットワークを広げていくことを目指しています。

実際の事業としては、1:おはなしボランティア指導者を養成し、学校や図書館で読み聞かせを始める子ども読書ボランティア団体に派遣し、アドバイスをを行う。

2:子ども読書に関わる人への講座・研修会、集会を開催。

3:子ども読書関連情報の提供。

4:子ども読書活動相談業務、等々。

最近では小・中学校で、父兄の「朝の読み聞かせ」等が活発に行われ、関連した質問も図書館によく寄せられます。

埼玉大学の卒業生は、教職に就かれる方が多いとのことなので、図書館でこうした活動を行っていることを心にとめていただき、近い将来、ネットワークの一翼を担って、子どもたちと本との幸福な出会いにつなげていただければ幸いです。

(埼玉県立久喜図書館 山元明美)

「そよかぜ」を知っていますか

そよかぜ保育室は、昨年4月、埼玉大学の西側キャンパス内に開設致しました。上井喜彦学長および大学のご理解のもと、新設の園舎を大学より借り受け、特定非営利活動法人そよかぜ(代表理事 教養学部伊藤博明教授)が母体となり、運営いたしております。

さいたま市からの委託料と、保護者からの保育料収入を運営費とし、NPOそよかぜへの会費収入で施設の充実を図っております。さいたま市の無認可保育施設、「ナーサリールーム」という位置づけで、定員は30名です。

現在、大学関係者(教職員、留学生)3分の2、地域住民3分の1という在籍で、0歳から5歳までの子どもたちが毎日

元気に通園しています。

特別に設置していただいた大学との「通用門」を通して、ほぼ毎日大学内へのお散歩を楽しんでいます。四季折々の変化に富んだ大きな、大きなお庭を、子どもたちは走ったり、お花と戯れたり、芝生で寝転んだり、丘やスロープで冒険したり、バス見学や、時には水遊び、時には学生さんたちとの触れ合いなど、いろいろな経験を重ねてきました。



また教育学部農場での収

穫作業も体験させていただき、ジャガイモから始まり、さつまいもや大根などのずっしりとした感触に、子どもたちは驚異の目を向けていました。

留学生たちの国籍は、バンラデシュ、タイ、マレーシア、パキスタン、インドネシア、エジプト、ウィグル自治区、中国、韓国などにわたっています。宗教や気候風土などの違いはありますが、子どもたちは皆同じです。言葉の違いを物ともせず、保護者や保育者も仲間となり、大きな家族となっています。

いつでも元気な子どもたちに会いに、「そよかぜ保育室」にお立ち寄りください。

(そよかぜ保育室 橋本慶子)



けやきの窓



私の推薦図書 本を推薦する依頼があった。難しい課題である。いくつかの推薦の仕方があるからである。全学の学生向けを想定して、次の3つのいい方があると思う。そのそれぞれについて書いてみよう。

第1に、大学時代に古典を読み、といたい。じっくりと古典を読むのに最も良い時期は学生時代だからである。古典を読んでいることは気づかぬうちに、その後の人生の基盤として活きるし、自信にもなる。実は教養学部では、密かに(?)「古典百選」を選定している。じきに公開することになるだろう。今調べてみると、私が推薦して百選に入ったのは『アイヌ神謡集』、『三国志演義』、『白鯨』、『唐詩選』くらいだった。むろん『悲しき熱帯』や『君主論』なども並ぶ。これらの古典は図書館には収められているけれども、図書館分館である新規開業の教養学部資料センターでは目立つ場所に収めてある。是非利用していただきたい。

第2に、大学で学ぶ事柄の背景を伝える良書を読むべきだろう。今年度から私は、教養学部でグローバル・ガバナンス専修課程で教えることになった。その関連であげるなら、アマルティア・センがグローバルな視点で人間と社会の存立を論じた『人間の安全保障』(集英社)や『グローバリゼーションと人間の安全保障』(日本経団連出版)、最上敏樹『いま平和とは』(岩波新書)は、優れた本であると思う。

第3に、知的に活発な学生は論争的な本を読むとよい、と思っている。ファンも多いが批判も多い著作である。批判が多いということは、それだけ本質的な論点に触れていることを意味している。例えば、ハンチントンの『文明の衝突』(集英社)や、フランシス・フクヤマの『歴史の終わり(上・下)』(三笠書房)である。これらの著者は巨視的な視点で世界の動きを論じていると同時に、社会科学的に重要な論点を広範に扱っている。

(教養学部長／教授 高木英至)